

# 光を浴びる女性達

宮本三郎の眼 都市に生きる表現者

4月1日 日 – 7月22日 日



〈浅草の踊子〉1963 (昭和38)年



〈演奏者〉1956 (昭和31)年



〈鰯淵晴子像〉1970 (昭和45)年



〈三人の女像〉1962~64 (昭和37~39)年



〈おどりこ〉1962~64 (昭和37~39)年

戦後から1950年代後半までの間、日本国内の美術界では、アンフォルメルやアクションペインティングといった、新しい絵画表現の動向が大きな影響を及ぼしていました。

具象の画家・宮本三郎もまた、この時期は戦後の模索を経て、抽象絵画の技法、表現を自作に取り込みつつ、絵画表現の可能性を探究する、格闘の日々を過ごしています。

1960年代に入ると宮本は、大都市・東京の夜の姿を「明滅する光の抽象的美観」と形容し、夕景・夜景の作品を数多く描いています。その一方、都会の中で舞台上に立ち、自らを表現する人々にも関心を向けました。

「演奏者」(1955年)で描いたバイオリニストの巖本真理をはじめとし、歌手の雪村いづみ、女優の鰯淵晴子といった、世に知られた人物をアトリエに招き、その肖像を描くほか、無名の女優を長年にわたって追いつけた「女優」や、「バレリーナ」のシリーズなどの作品群を手がけています。

また「浅草の踊り子」シリーズでは、着飾った踊り子達を描くだけでなく、楽屋や舞台のそでにも取材に訪れ、身支度の様子や、ステージでの場面を活き活きとスケッチしています。また、そうしたスケッチを通じ、宮本がバンドマンやオーケストラにもまなざしを向けていることがわかります。

「踊子には大へん興味をそそられる。〈中略〉舞台の上の仮装に生活をかけて、自分自身をかけている、というところに、画家として大いにひかれる。〈中略〉自分自身にうちかっている職業人は、画家としてはとても描きやすい。自分を支えている精神の強い人はモデルとしての姿勢もいい。こういうことは、職業モデルにも、芸術家にも、浅草の踊子についても、共通しているという気がする。」(「随想 画家とモデル」『サンデー毎日』1966年5月22日号)

宮本は彼自身と同じく、表現することに「自分自身をかけ」た人々に独特の共感と感慨を抱き、その表情、姿態の端々に、“表現者”として生きる人間の強さと輝きを見たのでしょう。

モデルとしてカンヴァスの前に立つ“表現者達”が発散する情熱は、画家の感情を強く刺激し、力強い表現となって画面に立ち現れています。またそこには、晩年の「生の喜び」を花と裸婦に託したシリーズへと至る、人間の実存に迫ろうとする宮本の志向を垣間見ることができます。

都市に生きる表現者ととらえた画家の眼、そこに表出した画家とモデルとの交感、実感と共感をともなった軌跡を示し、従前にはなかった新しい宮本三郎の境地を見せてくれています。